

えかぬる日は、雪もかくすに所なき也、爰におもへば、摺小木の境界は、身に著す口にむさぼらず混々沌々たるべきを、比叡の山法師にそ、なかされ、横川の杉の嵐に高ぶり、天狗の鼻の慢心をつたへて、ある時は遊山の辨當につれだち、ある日は恪氣の鐵丁にまはされて、果は化物揃にくは、り、たちまち一目を生ずれば、摺鉢の笠を著そらして、伽藍にひゞき谷にこたへ、山また山をめぐるとて、其名もめぐりと呼れぬるは、三界轉廻のくるしみも、いづれの世にとおそるべし、されば古人の箴に、心の手綱をゆるすなとは、肥馬輕裘の人をいへれど、汝はいつも裸身にして、たとひ月見の船にうかれ、花見の幕にあそぶとも、おのが身ざまに、玄のぶべくもあらずは、色このまざらんには、玄かすと、心の下帯を玄むべき也、

註曰、○中略 大師講トハ傳教大師ノ事ナリトゾ、按ズルニ、其日ハ小豆粥ノ初穂ヲ摺鉢ニ入テ、摺

小木ヲ中ニ指入レ、臺所ノ棚ニ供フ、此式ハ下様ニ起リテ、諸國ニ色々ノ品アリトゾ、

〔千紅萬紫初集〕すり小木のことば

もろこし杭州の人は、日ごとに三十丈の檣槌をくふといへり、いはんや萬國の都にすぐれたる、大江戸の百萬戸、二百六十餘の公侯、八萬騎の士大夫、二千餘町の市町、寺社、倡優の數をえらず、一日に何萬丈のすり小木をくはんとおもふも、例の江戸自慢にして、豆腐を秤にかけてくふ祇園守の紋つけたる上方者などは、駄味噌を上るとわらふなるべし、

すり小木もれん木も同じ山椒みそ伊勢すり鉢に備前摺鉢

薑擦

〔書言字考節用集七〕薑擦ワサレテコロシ

〔和漢三才圖會三十一〕薑擦庭厨具 薑擦和左比乎呂之

按薑擦以銅作、狀如小華、而面起爪刺、以擦山葵生薑甘藷等、其裏爪刺略粗、可以擦蘿蔔、

〔江戸名所圖會七〕古製山葵擦